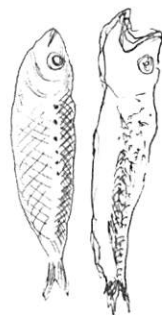


2017.01

## 命をいただく



東直子

人生の最後になにを食べたいか、という質問は、何度も実際に交わしたことがある。今も誰かが誰かに質問しているのではないだろうか。私のまわりでは、すし、うなぎ、ステーキといったご馳走派と、おにぎり、白いごはん、きつねうどんといったシンプル派とに分かれた気がする。死が待ちかまえているのだから、現実的にはお粥のようなものしか口に入らない気がするが、せめて最後くらいは一番好きだったものを食べたい、というのがご馳走派の願いだろう。この質問に対して最初にぱっと浮かんだ料理が、その人にとって一番おいしいと思った記憶の詰まった料理なのかと思う。

私が今頭に浮かべたのは、「梅干し入りおにぎり」である。コンビニで売っているものではなく、遠足や運動会なんかで野外で食べたあの、母の握った丸いおにぎり（母は関西出身なので、おにぎりは丸い）。最初からずっと貼り付けてあるためすっかり湿った海苔と、紀州のほっとりとした梅干しの果肉。考えただけで唾液が出てくる。

よく運動した体と野外の空気も含めて、とてもおいしいと感じたのだった。

手塩といふやさしき味をむすびたる越のしら飯野ひびにかがやかす  
馬場あき子

空想をかたちせむと夢みたりたとへばご飯を手に結ぶごと  
北沢郁子

おにぎりをつくることを、ご飯を「にぎる」とも「むすぶ」とも言うが、この二首はともに「むすぶ」派である。料理方法の動詞として、なんてすてきな言葉だろう。素手で直接かたちづくるこの料理、あらためて原始的で根源的な料理方法だと思う。

街を歩けば、世界各国のありとあらゆる料理の専門店が軒を連ね、日本人はよほど好奇心が強いのか、とあきれるほどだが、歌に詠まれるのは、やはり慣れ親しんだ料理のものの方が多い気がする。

夕餉にはうどん煮るとてその事を朝より待てりわれも子どもも

吉野秀雄

夕餉のうどんを朝から楽しみにしている父と子。なんとなく「われ」の方が、うどんを楽しみしている熱量が高いような気がして、なんてかわいいお父さんかと思う。大量生産される食べ物が多かった時代に、つましく心をかよわせ合っているあたたかい家族の姿が「うどん」を通じて伝わる。

「この味がいいね」と君が言ったから七月六日はサラダ記念日

俵 万智

吉野の生年の一九〇二年より六十年のちに生まれた俵が表現したのは、恋人と食べるサラダ。二人の間だけで生まれた喜びを二人だけの「記念日」とする特別感が、高揚している恋の気分を伝えていく。ちなみに、この歌のもととなったエピソードで実際に食べたのはカレー味のから揚げだったらしい。もしも「から揚げ記念日」が歌集タイトルになっていたら、あれほどのヒットはなかったのではないか、と思ってしまう。俵の歌のアレンジ力を見る気がする。

焼き肉とグラタンが好きという少女よ私はあなたのお父さんが好き  
俵 万智

同じ俵の作品だが、複雑な関係での恋愛感情を、「焼き肉」と「グラタン」という、方向性の違うねちっこい料理が際立たせている。食欲と性欲が重なり合い、人間の業にふれるような、怖くて深い歌だと思ふ。

太りたる肝を抜かれしするめ烏賊威嚇の色の弱くなりゆく

松崎英司

くもりなき平面を断つ心地して河豚の白子に塩をあてがふ

花豆の蜜煮の艶のうれしくて人肌の鍋は静かにしまふ

この三首が収載されている歌集『青の食單』<sup>レシビ</sup>には、様々な調理の場面を詠んだ歌が入っている。作者の松崎は、横浜のホテルのレストランで腕をふるう、プロの料理人なのである。目にも舌にも喜びを与えてくれる日本料理の、食材への慈しみが感じられる歌である。食べるために命を奪われる生物の姿がまざまざと見える。まぎれもなく命をいただいているのだ、ということをしみじみと感じ、料理が食べられることの喜びを新たに思う思いである。

松崎の歌と関連して思い出す歌がある。

真イワシのてびらきスプラッタ・シヨのあとの急にあどけなくなる会話  
北川草子

真イワシは身が柔らかいので、素手で腹を裂いて内臓を取り除く。おそらく恋人と二人で行ったそれを「スプラッタ・シヨ」と表現するところが現代的だが、食べることが真イワシの命を虐殺するということになるという事実を実感したうしろめたさが、会話をあどけなくさせたのだらう。童話的なモチーフの多い彼女の作風の中で、異彩を放つ一首である。北川は、同じ歌雑誌の同人だったが、三十歳の若さで亡くなってしまった。生前、真夏に歌会で会ったとき、夏は素麺を毎日食べている、という話をしてたことを思い出してエッセイに書いたことがある。そのとき、思慕のような追悼のような想いを込めて、次の一首を詠んだ。

夕方に会う約束のあるという娘しずかな氷上の麺